

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24660036

研究課題名(和文) 在日高齢者・韓国人高齢者と日本人高齢者の抑うつ要因にかんする研究

研究課題名(英文) Research that concerns factor of depression of elderly in Japan, South Korean elderly, and Japanese elderly

研究代表者

伊藤 尚子 (ITO, NAOKO)

名古屋大学・医学(系)研究科(研究院)・助教

研究者番号：80456681

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：地域在住高齢者の中でも識字などに問題があり、ハイリスク高齢者になりやすい在日1世コリアン高齢者に焦点を当て、在日コリアン高齢者の抑うつとソーシャルネットワークとの関係を調査し、在日1世コリアン高齢者に対するネットワーク支援モデルを構築することを目指す。調査は在日コリアン高齢者の支援を行うエスニックグループで実施した。調査の結果、独居よりも家族と同居している高齢者が多いにも関わらず、都市部の日本人独居高齢者と同程度の抑うつ傾向にあることが明らかとなった。また、抑うつ関連因子としては、友人および家族との接触に関連があることが明らかとなった。その結果から支援モデル構築の検討を行っている。

研究成果の概要(英文)：We surveyed the relationship between depression and social interaction among elderly Koreans residing in Japan. In particular, we focused on elderly first-generation Koreans residing in Japan, many of whom have literacy problems and can easily become high-risk elderly persons among those residing in less-urbanized localities. Through the survey, we sought to explore factors associated with depression that affects elderly Koreans residing in Japan. Based on the results, we intend to build a model for their nursing and welfare assistance. The survey results revealed that despite the fact that in less-urbanized areas most of these elderly people live with families than alone, their tendency toward depression is on the same level as that experienced by elderly Koreans living alone in Japan's urban areas. Furthermore, the degree of depression was shown to be related to individuals' degree of contact with friends and family.

研究分野：地域看護

キーワード：在日コリアン高齢者 高齢者 抑うつ

### 1. 研究の背景

在日コリアン高齢者への介護活動として、集住居住地区の在日2世、3世コリアンが在日コリアン高齢者を支える活動報告が報告され始めているが、その多くは高齢者福祉のなかで、事例として報告をされていることが多い。わが国では急速な高齢化に対応するために、高齢者の生活の質の向上に向けた研究の積み上げが急務となっている。そんな中、高齢者の健康関連 QOL の向上、主観的健康観や抑うつ関連因子の解明の必要性が増大している。しかしながら、在日コリアン高齢者に対しては、大阪など集住居住地区の在日コリアン高齢者の生活実態調査や、日本人との抑うつ、転倒などの比較調査は行われているが、集住地区を除き、その他の地域では調査が進んでおらず、在日コリアン高齢者の介護予防への研究が未開拓であるのが現状である。

### 2. 研究の目的

地域在住高齢者の中でも識字などに問題があり、社会問題にもなっている在日コリアン高齢者に焦点を当て、在日コリアン高齢者の抑うつとソーシャルネットワークとの関係を比較検討し、在日コリアン高齢者に対する地域ケア・地域看護モデル構築を目的としている。抽出された抑うつ度の高低とソーシャルネットワークの関連要因と QOL、主観的健康観、ライフスタイル要因の関連を、比較検討する。

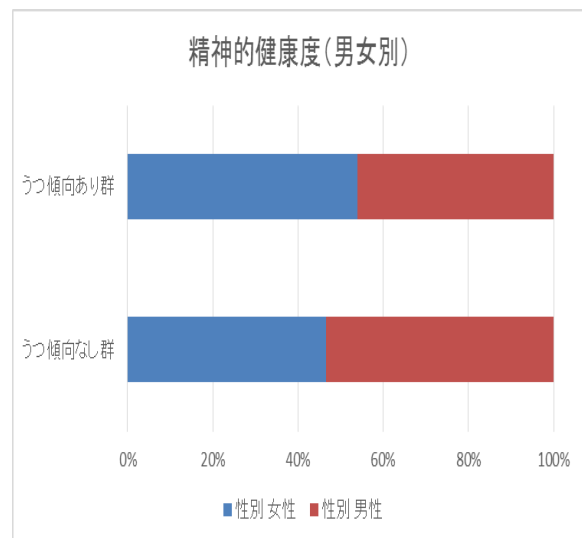
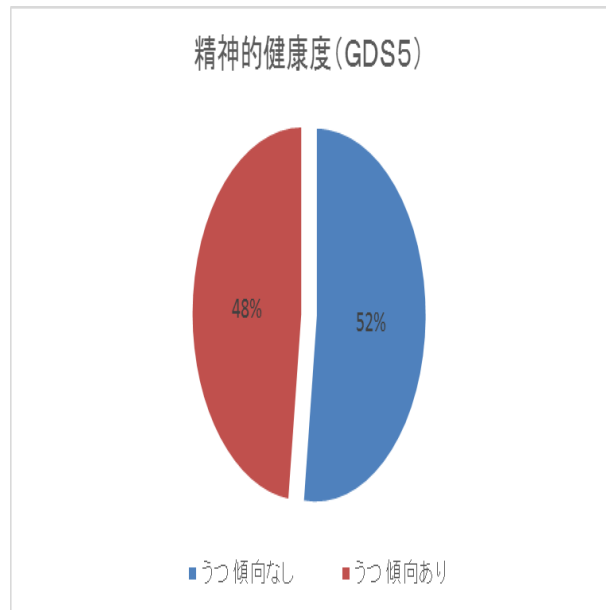
### 3. 研究の方法

平成 25 年度、平成 26 年度も継続した参与観察を行いながら、インフォーマルインタビューを行った。また、同時に質問紙を用い質問紙調査も行った。在日コリアン高齢者、韓国人高齢者は対象者の年齢、出身地の特徴、言語の制限があり、単独での調査研究の継続が困難である。そのため、関係のあるエスニックグループに協力を求め同意を得たうえ

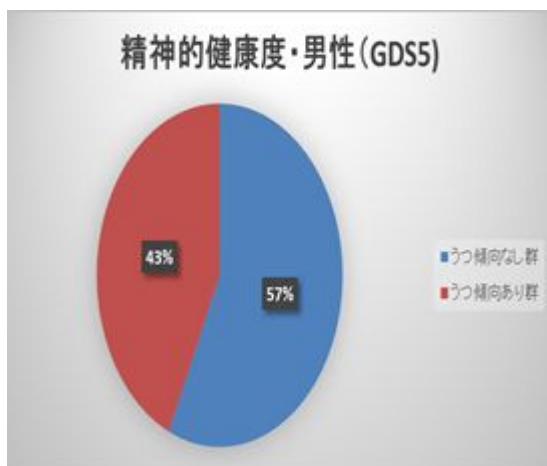
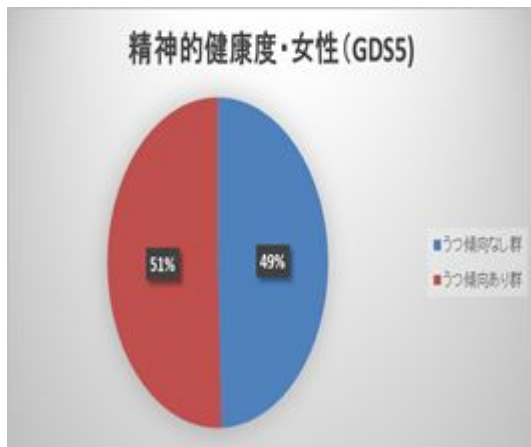
で研究を行った。また、定期的開催されている、在日コリアン高齢者支援の実務者会議や研修等にも参加し、情報収集及び情報交換も合わせて行った。

### 4. 研究成果

在日コリアン高齢者の抑うつ傾向割合は、全体では 52% がうつ傾向なしであったのに対して、48% がうつ傾向ありであった。



性別では、男性より女性が抑うつ傾向を訴えている割合が多く、女性の 50.6% が抑うつ傾向あり群、男性では 43.2% が抑うつ傾向あり群であることが明らかになった。



47.8%の抑うつ傾向は、先行研究では都市部の独居高齢者と同程度の結果であった。

居住割合については、独居者が少なく、17%、同居者が83%と同居高齢者が多い結果となった。また、朝鮮半島出身者(1世)高齢者のみの分析でもうつ傾向が高い結果となった。次に、在日コリアン高齢者のQOLと関連因子についても検討を行った。年齢では、後期高齢者が前期高齢者に比べPCS・MCS共に有意に平均が低く、(P<0.01)出生地については、PCSが朝鮮半島出身者で有意に平均が低かった。(P<0.01)転倒経験がある場合は、PCS・MCSが有意に低い結果となった。多変量解析も同時に行った。身体的QOLのPCSの関連因子は、後期高齢者であること、転倒経験があることが採択され、この二変数の独立変数は体の健康を低下させると解釈できる。また、MCSの関連因子は、後期高齢者であることが採択され、後期高齢者であること

は、心の健康を低下させると解釈できる。分析結果から、東海地区に在住する在日コリアン高齢者は、男女とも後期高齢者であり、かつ転倒経験があることが、身体面、精神面のQOLに大きく関連している事が明らかとなった。在日コリアン高齢者についても、日本人高齢者と同様に転倒を予防することが必要である。今後の課題としては、生活習慣病との関連、年金等社会経済的要因、識字等を加味し分析、調査を行う必要がある。また、今回の調査では研究対象者を収集する方法が限られるなど、研究の限界もある。しかしながら、集住地区以外の在日コリアン高齢者のQOLを包括的な指標を使用した調査がなかったことから、外国籍高齢者への保健医療政策を考察する上での一助になると考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

伊藤尚子, Saveliev Igor 日本社会精神医学界 地域在住の在日コリアン高齢者におけるQOL関連要因の考察 査読なし 2013

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者:伊藤尚子(ITO, Naoko)  
名古屋大学・医学系研究科・助教

研究者番号：80456681

(2)研究分担者：なし  
研究者番号：